

動詞・副詞・形容語の「和語対非和語語種比率」 (RJF)による現代日本語文体の計量的比較考察

蓮 井 理 恵

キーワード RJF 和語語種率 動詞 形容語 副詞 和語 非和語 文体 計量研究

要旨

文体研究の一手法として、計量的手法がある。同手法は樺島（1979）以来、あまり多くはなされていないが、近年、安部（2013）によって、一定品詞における語彙の相違に着目したRJF（和語語種率）による研究手法が提唱された。本稿は、試論として提示されたRJFを用いて、「やわらかい文体」「中間文体」「硬い文体」と3文体に区分した中から各々2作品、計6種類の文体資料を分析することにより、RJFの有効性を検討するものである。この分析により、RJFと文体差に相関関係のあることが明らかになった。それと共に、日本語における複合動詞の位置検討、「漢語文体」「やわらかい文体」などの基準並びに、“和語”対“語幹+機能語”としてのRJF考察というRJFにより考えられる今後の発展的課題を提示している。

1. はじめに——文体研究と文体の計量的研究

日本語の文体研究というのはこれまで、“文芸的文章”と“評論的文章”、作家一人ひとりの書き方に関する研究、“デス体”“マス体”“テアル体”などの文末表現に焦点を当てた研究、人称代名詞の視点から考察する研究、段落構成による研究、一文あたりの長さ（文字数、文節数などによる）による計量的研究などと、多角的かつ多様に行われてきた。

中でも、一文あたりの長さによる研究もあるが、計量的手法による研究として代表的なものとしては、樺島（1979）が特によく知られている。これは品詞構成に着目し、「名詞・形容詞・形容動詞・連体詞、(Modifier)の総数を「動詞」(Verb)で割り、その時の「比率」(Ratio)を表すMVRを計量することにより、文体的特徴を分類するものである。その後、文体研究における計量的手法の新たなものは、田貝（2012）でも指摘されているようにあまり多くは提示されてきていないが、近年、安部（2013）

(2)

「日本語語彙の歴史的構造変化とそこから見た和漢2文体の類型指標」において、一定品詞における語種の相違に着目したRJF（和語語種率）¹による研究手法が試論として提示された。

安部（2013）に関しては次章において簡略に述べる。安部氏のRJFは、その語種比率の相違から、プロトタイプの抽出した日本語文体における口語的文体、文語的文体²の段階的・漸次的相違を、数値化して捉えようとするものである。

このように興味深い手法であるが同氏の論文では、理論と方法をただ一つのサンプル文にて試験的に紹介しているのみである。紙幅の制約もあるのだろうが、そのため、それが果たして多岐の文体に応用可能と言えるのかという点は十分には提示されていない。そこで本稿では、複数の文体に対して同方法を応用させることによって、RJFの有効性と今後の課題を検証並びに検討したい。

2. 安部（2013）でのRJFについて

ここでは、本稿が基とする安部（2013）の論について簡単に述べたい。同氏は基礎語彙の歴史研究から、古典的な和語文体から近現代型の「体言＋機能語」型の文体へと日本語が構造的に変化する傾向を主張しており、これを基に、語種論の立場から統計的な文体指標としてRJFを提唱している。

$$\boxed{\text{和語語種率 (RJF) (\%) = 和語語数}^3 \div (\text{動詞} \cdot \text{形容語}^4 \cdot \text{副詞の総数}) \times 100}$$

このようにして語種を文体指標とすることにより、語種から見た文体の特徴を出すことができる。

前述のように、安部氏の論ではRJFの提唱と共に、一つのサンプル文をやわらかい文体、硬い文体に変えることで指標を出しながら語彙の変換時の置き換えパターンを記すに留まっており、RJF自体の検証は未だなされていない。

3. 本研究での立場と分析方法

3. 1. 分析方法

本研究では、前章で示した安部氏の計算方法に基づき、文体指標を算出する。本稿はRJFの調査論文であり、母数を均等とするため、総数が40語程度となる範囲を選択している⁵。

なお、今回の分析対象は、動詞・形容語（形容詞・形容動詞の総称）・副詞とし、以下の資料文中においては、動詞＝実線、形容語＝点線、副詞＝二重線を引いて示している。更に、漢語に関しては該当部分に網掛けを付すこととする⁶。

ただし、動詞として単独に出現する「いる」「おる」「ある」「する」「なる」、そして形容語「ない」については対象外とする。前者の存在動詞3語（「いる」「おる」「あ

る)は、存在ないし存在の状態を示し、漢語や外来語での言い換えは「存在する」程度となる。更に、文体に関わらず多用されることから、これらの語を加えて比較を行うことは、文体差の比較としては却って不適となる。以上の理由により、除外するのである。同様に、「ない」「する」「なる」に関しても、漢語や外来語での言い換えに乏しいこと、文体に関係なく多用されることから、分析対象外とする。ただし、対象から除外するとはいえ、以下においては斜体を付すとともに、出現語数を記す。なお、動詞連用形に「テ」のついた「ておく」「ていく」「てある」のような補助動詞用法の例についても、分析対象を本動詞に限っていることから除外する。

更に、サ変動詞に関しては、「する」の前が和語であれば和語として、漢語であれば漢語として数える。文体差を鑑みるにあたり、一般に「和語+する」はやわらかい文体として、「漢語+する」は硬い文体として受け止めるように思われたためである。

最後に、動詞の連用形による語の中には、以下のようにそれらを動詞として捉えるか、動作的な意味の希薄化した状況説明的な連用的修飾句を形成している連語として捉えるか、区分の難しいものがある。

例：「によって (により)」「において (における)」「に対して (に対する)」「にわたって (にわたる、にわたり)」など

これらの語については、今回は『岩波国語辞典』において、動詞としての説明の中に連語の表記がある場合、連語として扱うものとして機械的に対象から除外している。

3. 2. 資料選定の理由

先述のように本稿は、安部 (2013) において提唱されている RJF (和語語種率) を用いて、実際にやわらかい文体・硬い文体・両者が混在する中間的な文体という3文体の指標を求め、それぞれの特徴を分析する、というものである。つまり、一般にやわらかい・硬いと思われる文体の資料を扱い、その語種率を数値化することにより、実際にそれらが和語文体、漢語文体などということができるのかを明らかにしようとする目的である。

なお、本稿においては、次の6資料を分析対象としている。

やわらかい文体：①新美南吉 (1932) 「ごんぎつね」

②木村裕一 (1994) 『あらしのよるに』

中間：①田中宏 (2004) 『ミクロ経済学入門講義』

②防衛相 (2007) 「平成19年版防衛白書」

硬い文体：①「日本国憲法」

②内閣府白書 (2006) 「平成18年6月8日物価安定下の世界経済、世界経済の見通し」

やわらかい文体としては、子どもを読者対象としており、今現在においても多くの人

(4)

が読んでいると考えられるため、時代の異なるこの2作品を選んでいる。また、中間的な文体にこれらを選択した理由としては、硬いテーマでありながら初歩的ないし一般の人々に向けて書いていると思われることが挙げられる。

最後に、硬い文体として挙げた2資料、憲法並びに公的文書かつ経済について述べている白書は、いずれも一般に理解が容易でないであろうことから選定した。

4. 文体別資料の分析・考察

4. 1. やわらかい文体

4. 1. 1-1. 新見南吉「ごんぎつね」

まずは、やわらかい文体として新見南吉による「ごんぎつね」から見ていきたい。これは、前述の通り子どもを読者対象として書かれ、国語教科書にも広く採用されている作品である。

なお、本稿で引用した青空文庫においては同文中にルビが振られていたが、分かりやすさのため論者により削除している。また、該当語が連続して出現する際には、語の切れ目を分かりやすくするため半角分の空白を入れている。以下、他の資料でも同様である。

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとって、いったり、いろんなことをしました。

或秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、百舌鳥《もず》の音がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川《おがわ》の堤《つつみ》まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにごった水に横だおしになっ

て、もまれています。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

「ごんぎつね」の和語語種比率、つまり RJF は、総語数39中和語38語より、97.4%である。

総語数では動詞が最も多く、27語ある。以下、動詞、形容語、副詞の品詞別出現語一覧を載せる。なお、この一覧では、終止形（出現形）の形で表記する。これは、出現時の語形のみを抽出するのでは一覧として見た時に雑然としてしまうためである。また、終止形のみでの表記でも、同じ語形が他の箇所にある場合は不鮮明になることから、上述の表記とする。以下の節でも同様である。

〈品詞別出現語一覧〉

動詞 きく (きい)・はなれる (はなれ)・しげる (しげっ)・ほる (ほっ)・住む (住ん)・出る (出)・入る (入っ)・ほる (ほり)・ほす (ほし)・つける (つけ)・つるす (つるし)・むしりとる (むしりとっ)・いる (いっ)・ふる (ふり)・出る (出)・しゃがむ (しゃがん)・あがる (あがる)・はい出る (はい出)・晴れる (晴れ)・ひびく (ひびい)・出る (出て)・光る (光っ)・ます (まし)・つかる (つかる)・にごる (にごっ)・もむ (もま)・歩く (歩い)

形容語 小さい (小さい)・小さい (小さな)・少い (少い)・黄いろい (黄いろく)

副詞 少し (少し)・~~一ぱい (一ぱい)~~・ほっと (ほっと)・からっと (からっと)・きんきん (きんきん)・まだ (まだ)・いつも・どっと (どっと)

出現した語から、漢語や外来語へ言い換えられるものと考えてみると、言い換えられると思われる語は次の通りである。

〈言い換え可能だと思われる語〉

動詞：はなれる (はなれ) → 距離のあ、しげる (しげっ) → 繁茂し、住む (住ん) → 居住し、出る (出) → 出現し、つける (つけ) → 着火し、晴れる (晴れ) →

晴天で、ます (まし) → 増加して、つかる (つかる) → 浸水する

形容語：少い (少い) → 少量な、黄いろい (黄いろく) → 黄色 (おうしょく) に

副詞：少し (少し) → 若干、まだ (まだ) → 依然として

枠を付けた言い換えは、品詞が変わるものである。これは和語から他の語種へと変える際、同一の品詞では適切なものが無く、名詞表現にする場合がある可能性を示している。また、波線を付した二語は、その前の「火を (つけ)」「水に (つかる)」と合わさってそれぞれ漢語動詞となっている。

なお、「はいでる」といった複合動詞は言い換えが難しく、「きんきん」「からっと」といった状態を表すオノマトペとも取れる副詞も同様に他の語種への変換は困難である

(6)

と思われる。

最後に、除外している語については「する」2語、「ある」「いる」「なる」「ない」がそれぞれ一語ずつ出現していた。

4. 1. 1-2. 木村裕一 (1994、2005第39刷) 『あらしのよるに』

この作品は、後に映画化され、アニメ映画本、文庫本も出版され読者層を拡大している。そのそれぞれの形態では、読者対象に合わせたためかそれぞれの文体や書き方は異なるが、今回は児童書として出版された本作品を取り扱うこととする。

ごうごうと たたきつけてきた。

それは 『あめ』というより、おそいかかる みずの つぶたちだ。

あれくるった よるの あらしは、その つぶたちを、ちっぼけな ヤギの からだに、みぎから ひだりから、ちからまかせに ぶつけてくる。

しろい ヤギは、やつの おもいで おかを すべりおり、こわれかけた ちいさな こやに もぐりこんだ。

くらやみの なかで、ヤギは からだを やすめ、じっと、あらしの やむのを まつ。

ガタン!

だれかが こやの なかに はいつてくる。

ハアハアという いきづかい。

なにものだろう?

ヤギは じっと みを ひそめ、みみを そばだてた。

コツン ズズ、コツン ズズー。

いっぽ いっぽ、かたい ものが ゆかを たたいて やってくる。

ひづめの おとだ。

なあんだ、それなら ヤギに ちがいない。

ヤギは ほっとして、そいつに こえを かけた。

「すごい あらしですね。」

「え? おや、こいつは ひつれい、ハア ハア、しやした。

まっくらで、ちっとも、ハア ハア、きが つきやせんで。」

あいては、ちよっと おどろいて、あらい いきで こたえる。

「わたしも、いま とびこんできたところですよ。

しかし、こんなに ひどく なるとはね。」

RJF は94.7% (総数38、和語36語) である。先に出した「ごんぎつね」と比べると、

和語比率が若干ではあるものの低い結果となっている。漢語が生じている箇所は、冒頭の情景描写並びに「しろいやぎ」が出会った何か(オオカミ)による発話部分である。

以下、前項と同様に進める。

〈品詞別出現語一覧〉

動詞 たたきつく (たたきつけ)・おそいかかる (おそいかかる)・あれくるう (あれくるう)・ぶつける (ぶつけ)・すべる (すべり)・こわれる (こわれ)・もぐりこむ (もぐりこん)・やすむ (やすめ)・やむ (やむ)・まつ (まつ)・はいる (はい)・ひそめる (ひそめ)・そばだてる (そばだて)・たたく (たた)・やる (や)・かける (かけ)、しつれいする (しつれい (しやし))・きがつく (きがつき)・おどろく (おどろい)・こたえる (こたえる)・とびこむ (とびこん)

形容語 ちっぼけだ (ちっぼけな)、ちからまかせだ (ちからまかせに)、しろい (しろい)、ちいさな (ちいさな)、かたい (かたい)、すごい (すごい)、まっくらな (まっくらで)、あらい (あらい)、こんな (こんなに)、ひどい (ひどく)

副詞 ごうごうと (ごうごうと)、やっと (やっと)、じつと (じつと)、じつと (じつと)、ほっと (ほっと)、ちっとも (ちっとも)、ちょっと (ちょっと)

動詞の下線箇所は成句を成しているものである。

〈言い換え可能だと思われる語〉

動詞：まつ (まつ) → 待機する、おどろく (おどろい) → 驚愕し、こたえる (こたえる) → 返答する

形容語：ちっぼけだ (ちっぼけな) → 極小な、しろい (しろい) → 白色の、

副詞：ほっと (ほっと) → 安心し

先に示したように、成句を成している語(「体をやすめる」「身をひそめる」「耳をそばだてる」など)は、変換が難しい。また、同様に複合動詞の変換も想像しにくい傾向が見られる。例えば、「すべりおり」であるが、これを漢語変換すると「滑落し」となるだろう。しかし、「滑落する」では「滑り落ちた」とも解釈でき、意味範囲が広がることから必ずしも文脈と合致しなくなる。

このように、複合動詞の場合、和語から漢語へとただ単純変換するのでは、異なる状況を説明することになってしまう場合がある。語種変換に際して生じるこのような問題は、日本語における複合動詞の位置を検討する上で、語彙的にも文体的にも今後の研究課題となることを示唆している。

なお、この資料においては除外動詞は無く、連語として「にちがいない」が一例あったのみである。

(8)

4. 1. 2-1. まとめ

以上、やわらかい文体の例として2作品を見てきた。これらは、RJF比率としてはいずれも90%を超え、和語文体とすることができる。一方において、1930年代に子どもを対象として書かれた「ごんぎつね」よりも、65年後に作られた『あらしのよるに』の方が、複合動詞が多く万遍なくどの品詞も使われている、といった点において単純ではなく、複雑性を帯びてきた様子がかがえる。

いずれにしても、このようにやさしい文体の代表とも思われる児童作品の比率を出すと、和語文体となることが証明された。

4. 2. 中間文体

4. 2. 1-1. 田中宏 (2004) 『ミクロ経済学入門講義』

#1 市場と統制, 資本主義と社会主義

(1) 経済とは

人々が「多ければ、多いほどよい ("the more, the better.")」と評価するもの、これを経営財 (economic goods) という。略して財という。例えば、パンやバター。

これらは人々が欲するだけの十分な量はない。つまり 稀少 (scarce) である。なぜか? それはパンやバターをつくり出すための資源 (労力、土地、etc.) が稀少だからである。もとよりこれらの資源も「多ければ、多いほどよい」と評価される (なぜならパンやバターをつくるから) から経済財である。

さて、そうであれば、稀少な資源を有効に 使用しなくてはならない、無駄な使い方はしないようにしなくてはならない。人々にとってはあれも欲しい、これも欲しいということだが、資源に限りがあるから、すべて 欲しいものを欲しい量だけ入手できない。そこで欲しいもののうち一部は断念しなくてはならない。比較的 欲しい度合いの低いものに資源を割り当てないで、緊急なものの入手のために資源を割り当てる。こういった「やりくり」が必要となる。

RJFは6.8%であり (総数37語、和語21語)、和語対漢語は四捨五入して6:4である。

<品詞別出現語一覧>

動詞 評価する (評価する)・略す (略し)・欲する (欲する)・つくり出す (つくり出す)・評価する (評価さ)・つくる (つくる)・使用する (使用し)・入手する (入手)・断念する (断念し)・割り当てる (割り当て)・割り当てる (割り当てる)

形容語 多い (多けれ)・多い (多い)・よい (よい)・十分だ (十分な)・稀少だ (稀少である)・稀少だ (稀少だ)・多い (多けれ)・多い (多い)・よい (よい)・稀少だ (稀少な)・有効だ (有効に)・無駄だ (無駄な)・欲しい (欲しい)・欲しい (欲しい)・欲しい (欲しい)・欲しい (欲しい)・欲しい (欲しい)・欲しい (欲しい)・低い・緊急だ (緊急な)・必要だ (必要)

副詞 例えば (例えば)・つまり (つまり)・もとより (もとより)・すべて (すべて)・比較的 (比較的)

のべ語数で見ているために、和語の出現する箇所を見ると、同一語が幾つか見られることが分かる。「割り当てる」「多い」「欲しい」がそうであるが、全体として形容語・副詞に和語が使用されている。その反面、漢語は動詞、更に異なり語数として見ると形容語で使われやすいことがうかがえる。

〈言い換え可能だと思われる語〉

動詞：欲する (欲する) → 欲しいと思う、つくり出す (つくり出す) → 生成する、つくる (つくる) → 生成する、使用する (使用し) → 使わ、入手する (入手) → 手に入れ、断念する (断念し) → 諦め、割り当てる (割り当て) → 配当し、割り当てる (割り当てる) → 配当する

形容語：多い (多けれ) → 多量であ、多い (多い) → 多量である

副詞：つまり (つまり) → 畢竟、もとより (もとより) → 言うまでもなく

面白いことに、動詞の変換量は、先のやわらかい文体として挙げた語よりも多くなっている。この中で言い換えが困難であると考えられるのは、「評価する」「略して」程度ではないだろうか。なお、「略す (る)」という語は安部 (2013) でも指摘されているように漢語一語動詞であり、一般の日本語母語話者でも、もはや漢語か和語かという語種の区別意識が乏しいものであろう。

形容語の言い換えで囲み線を引いた「多ければ多いほど」であるが、この後に続く「よい」については、「何がよいのか」によって言い換えが変わってくる。例えば、質について述べているのであれば「良質だ」となり、状態であれば「良好だ」となるだろう。しかし、ここではいずれも一致するとは思にくく、よって和語の漠然とした特徴が適合すると思われる。なお、この箇所では引用の英文に「better」が使用されているが、どうかして「よい」を言い換えようと思った場合、「ベターだ」ということもあるのだろうが「グッドだ」(「多ければ多いほどグッドだ」)ともなるのではないだろうか。日本語母語話者が外来語を取り入れる際の使い分けについても、考察を行う余地があるように思われる。

最後に、「欲しい」に関しては、動詞形に「欲する」が使用されているものの、形容

(10)

詞としては後半において6語、比率にして全体の16.2%出現している。これを和語以外に言い換えるとすると、名詞が後接する場合は「欲する・欲求する」という漢語表現が成り立つものの、単独で使われている場面においては難しい。

対象除外に関して見ると、「ある」1例、「する」1例、「ない」1例が確認できる。

4. 2. 1-2. 防衛省 「平成19年版防衛白書」

第I部

わが国を取り巻く安全保障環境 概観

1 全般

昨年から本年前半にかけては、北朝鮮による弾道ミサイル発射と核実験実施の発表、米国による新イラク政策の発表など、わが国をはじめとする国際社会の平和と安全の観点から注目すべきさまざまな事象がみられた。

こうした今日の安全保障環境の最大の特色は、脅威が多様化、複雑化するとともに、こうした脅威の顕在化を正確に予測することが困難になっていることであり、これに対する各国の対応の面でも新たな取組が求められてきている。

核・生物・化学兵器などの大量破壊兵器やそれらの運搬手段となる弾道ミサイルなどの拡散は今日の安全保障上の大きな脅威のひとつと認識されており、大量破壊兵器拡散問題への取組は国際社会における差し迫った課題になっている。北朝鮮の核問題やミサイル問題はわが国の安全保障に深刻な影響を及ぼすのみならず、大量破壊兵器などの不拡散の観点から国際社会全体にとって重要な問題となっている。また、国連安保理決議など国際社会の圧力にも関わらず、イランはウラン濃縮を継続しており、依然として問題の解決には至っていない。さらに、守るべき国家や国民を持たず、従来の抑止が有効に機能しにくいとされている国際テロ組織などによる大量破壊兵器などの取得、使用に対する懸念も高まっている。

また、国際テロ組織などの非国家主体の活動による脅威の高まりは近年の世界の安全保障環境を特徴づける重要な要素の一つである。従来の抑止が有効に機能しにくいとされている国際テロ組織などの非国家主体は、グローバル化の進展ともあいまって、かつては持ち得なかった攻撃手段、破壊力などを保有している。加えて、非国家主体は通常の軍隊とは異なる、多様な国籍の構成員を含む分散されたネットワーク型の組織を持つことが多いとされ、これに有効に対処することは非常に難しい。

総語数42語の中で、RJFは45.2%である。漢語23語であり、漢語率としては54.8%といえる。

〈品詞別出現語一覧〉

- 動詞** 注目する (注目す)・みる (み)・多様化、複雑化する (多様化、複雑化する)・予測する (予測する)・求める (求め)・認識する (認識さ)・差し迫る (差し迫っ)・及ぼす (及ぼす)・関わる (関わら)・継続する (継続し)・至る (至っ)・守る (守る)・持つ (持た)・高まる (高まっ)・特徴づける (特徴づける)・持ち得る (持ち得)・保有する (保有し)・異なる (異なる)・含む (含む)・分散する (分散さ)・持つ (持つ)・対処する (対処する)
- 形容語** さまざまだ (さまざまな)・正確だ (正確に)・困難だ (困難に)・新たな (新たな)・大きな (大きい)・深刻な (深刻な)・重要だ (重要な)・有効だ (有効に)・機能しにくい (機能しにくい)・重要だ (重要な)・依然 / 依然と (依然と)・有効だ (有効に)・機能しにくい (機能しにくい)・多様だ (多様な)・多い (多い)・有効だ (有効に)・難しい (難しい)
- 副詞** あいまって (あいまって)・かつて (かつて)・非常に (非常に)

概観すると、動詞での和語の使用が目立つが、ここでは、囲み線を引いた箇所に注目したい。「脅威が多様化、複雑化する」という表現である。これは勿論、「脅威が多様化し、複雑化する」となるところを、「～化する」と同一表現であることから、前者の活用を省略したものであると考えられる。

〈言い換え可能だと思われる語〉

- 動詞：注目する (注目す) → よく見、求める (求め) → 希求さ、認識する (認識さ) → 認め、差し迫る (差し迫っ) → 逼迫し、継続する (継続し) → 引き続き、至る (至っ) → 到達し、守る (守る) → 保護する、持つ (持た) → 有さ、含む (含む) → 含有する、分散する (分散さ) → 散らばっ、持つ (持つ) → 有する
- 形容語：正確だ (正確に) → 正しく、困難だ (困難に) → 難しく、有効だ (有効に) → よく、依然 / 依然と (依然と) → まだ、難しい (難しい) → 困難だ
- 副詞：非常に (非常に) → とても

言い換えを行うと、波線箇所はやや強引となり、解釈によっては適さなくなるかもしれない。更に、囲み線で示した「分散された」の言い換えであるが、ここでは「散らばった」とヴォイスが変わっている。これは、「分散される」に行為者による意志が感じられ、どこかに割り振るという印象すらある漢語表現が、和語になると上手くない例である。

対象除外の語については、「なる」3例が見られた。

(12)

4. 2. 2. まとめ

ここでは、同じ中間体の資料であっても、RJFが6割近いもの、つまり和語対漢語が6:4になるものと、RJFが4割程度であり、同様に4:6になる2資料を見てきた。両者を一見すると、総数約40語であるにも関わらず、その文量の違いが明確に分かるだろう。本稿では調査から外しているが、それぞれの語種使用率と文量は関係する可能性があるように思われる。換言すると、今回対象から除外している名詞のような比率も語種と関連する可能性があるのではないか、ということである。

この2資料を比べ、児童向け作品も鑑みると動詞は当然ながら、形容語でいかに漢語表現が増えるか、という点がやわらかさ・硬さを大きく分けているように思われる。

4. 3. 硬い文体

4. 3. 1. 「日本国憲法」

前文

日本国民は、正当に 選挙された国会における代表者を通じて 行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する 崇高な理想を深く 自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に 除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

ここでは、法律の条文と文体に差異が無い点並びに一定量をまとめて抽出できる点から、「日本国憲法」の前文を取り上げる。

硬い文体の代表と思われる憲法であるが、総語数39中のRJFは23%、つまり漢語語種率は77%（漢語30語）であり、8割に満たないこととなる。対象除外語として「な

い」が一例みられた。

〈品詞別出現語一覧〉

動詞 選挙する (選挙さ)・通ずる (通じ)・行動する (行動し)・もたらす (もたらす)・確保する (確保し)・起る (起る)・決意する (決意し)・存する (存する)・宣言する (宣言し)・確定する (確定する)・由来する (由来し)・行使する (行使し)・享受する (享受する)・基く (基く)・反する (反する)・排除する (排除する)・念願する (念願し)・支配する (支配する)・自覚する (自覚する)・愛する (愛する)・信頼する (信頼し)・保持する (保持し)・決意する (決意し)・維持する (維持し)・除去する (除去し)・努める (努めて)・占める (占め)・思ふ (思ふ)・免かれる (免かれ)・生存する (生存する)・有する (有する)・確認する (確認する)

形容語 正当だ (正当に)・厳粛だ (厳粛な)・崇高だ (崇高な)・深い (深く)・永遠だ (永遠に)・ひとしい (ひとしく)

副詞 再び (再び)

和語箇所を出現順に見ると、「もたらす」、「再び」、「起る」、「基く」、「深く」、「努める」、「占め」、「思ふ」、「ひとしく」、「免かれ」の10語がある。

動詞で漢語の使用されている箇所を見ると、その内「通じて」「存する」「反する」「愛する」「有する」と一語動詞が5語あることが分かる。

〈言い換え可能だと思われる語〉

動詞：選挙する (選挙さ) → 選ば、行動する (行動し) → 動き、確保する (確保し) → しっかりと持ち、決意する (決意し) → 心から決め、存する (存する) → ある、確定する (確定する) → きちんと定める、行使する (行使し) → 使い、排除する (排除する) → 取り除く、信頼する (信頼し) → 心から頼って、除去する (除去し) → 取り除く、努める (努めて) → 努力している、占める (占め) → 占有したい、生存する (生存する) → 生きる、有する (有する) → 持つ

形容語：正当だ (正当に) → きちんと、厳粛だ (厳粛な) → おごそかな、ひとしい (ひとしく) → 均等に

副詞：再び (再び) → 再度

上記を見ると、多くが漢字表記の一部をそのまま利用して変換を行っていることが共通して挙げられる。例えば、「選挙された」→ 選ばれた、「努めてゐる」→ 努力している、「厳粛な」→ おごそかな (厳かな)、「再び」→ 再度、というように、語種を変えたとしても一部を残して表現できる場合、意味範疇の誤差はあっても変換が行えると言える。他に、枠線を引いた「正当に」は、言い換えにより品詞が形容語から副詞へと変化

(14)

した。ここから、同品詞での変換が難しい場合もあることが分かる。

4. 3. 2. 内閣府白書2006年春「平成18年6月8日物価安定下の世界経済、世界経済の見通し」(世界経済の潮流(世界経済報告))

本文中の注は、本稿において必要としないことから論者により、除外して記載している。

第1章 物価安定下の世界経済

第1節 インフレを抑制し回復続く世界経済

1. 物価安定続く世界経済

●安定続く世界の物価

世界の物価上昇率は、1990年代初における約30%から4%へと低下した(第1-1-1表)。特に、最近では、原油価格高騰や景気の順調な回復等を背景に各国においてインフレ圧力が懸念されつつも、物価はおおむね安定した動きが続いている。

(表)

先進国についてみると、70年代には、物価の高騰と景気後退が同時に進行する「スタグフレーション」を経験し、80年代前半には物価上昇率が8%台であったが、以降低下がみられ、特に90年代後半以降は2%程度で極めて安定している。途上国では、アジアにおける物価安定が顕著になっているが、高インフレ国であったラテンアメリカを始めとするその他地域においても、基本的に安定化する傾向がみられる。特にラテンアメリカでは、80年代以降累積債務問題から高インフレに直面し、90年代前半には物価上昇率は263.5%となった。しかしながら、緊縮財政等のインフレ抑制政策の実施や、通貨危機後の変動相場制への移行等により、90年代末から物価上昇率は1桁台まで収束している。

また、最近における原油・商品価格の高騰局面である2003年秋以降をみても、消費者物価上昇率は先進国では抑制されている。世界全体で見ても、過去の高騰局面と比べ、抑制された状況といえる。

物価上昇率のばらつきを表す分散も、縮小している。物価上昇率の安定(ばらつきの縮小)は、(1)価格機能等市場メカニズムを改善する、(2)家計・企業等経済主体の先行きの計画を立てやすくする、(3)インフレリスクをヘッジするための資源を節約することができる等の利点がある。

●回復を続ける世界経済

一方で、世界の実質経済成長率は、90年代初の2%台から4%前後へとやや高ま

っている（前掲第1-1-1表）。先進国では、90年代前半の2～3%程度の成長率となっているが、成長率のばらつき（分散）をみると、90年代以降成長率がむしろ 安定する ようになっている。

総数41において、和語数15よりRJFは36.6%である。換言すると、漢語数は26であるので、漢語比率63.4%を有していることになる。

〈品詞別出現語一覧〉

動詞 低下する（低下し）・懸念する（懸念さ）・安定する（安定し）・続く（続き）・みる（みる）・進行する（進行する）・経験する（経験し）・みる（み）・安定する（安定し）・安定化する（安定化する）・みる（み）・直面する（直面し）・収束する（収束し）・みる（み）・抑制する（抑制さ）・みる（み）・比べる（比べ）・抑制する（抑制さ）・いう（いえ）・表す（表す）・縮小する（縮小し）・改善する（改善する）・ヘッジする（ヘッジする）・節約する（節約する）・できる（できる）・高まる（高まつ）みる（みる）・安定する（安定する）

形容語 順調だ（順調な）・顕著だ（顕著に）・基本的に（基本的に）・立てやすい（立てやすく）

副詞 特に（特に）・背景に（背景に）・おおむね（おおむね）・同時に（同時に）・特に（特に）・極めて（極めて）・特に（特に）・やや（やや）・むしろ（むしろ）

動詞で着目するのは、和語が出現している「続く（続き）」「みる（みる）」「みる（み）」「比べる（比べ）」「いう（いえ）」「表す（表す）」の異なり語数6語である。これらは資料本文中に記載されている表の分析として使われている表現である可能性もある。

更に、前節までの資料では出てこなかったが、「ヘッジする」というように「カタカナ語（外来語）+する」という表現が出ている。これは、安部（2013）では述べられていなかったものの、日本語の文章の中で目にすることがない訳ではない使用法であり⁸、当該箇所のような経済だけでなくメディアや医療など、様々な場において外来語の言い換えが進んでいるとはいえ、どのような外来語がどのように使われているのかを調べていくことの可能性があると言える。

〈言い換え可能だと思われる語〉

動詞：低下する（低下し）→低くなっ、懸念する（懸念さ）→気にさ、安定する（安定し）→落ち着い、続く（続き）→継続し、みる（みる）→着目する、進行する（進行する）→進む、経験する（経験し）→味わい、安定化する（安定化する）→落ち着く、直面する（直面し）→打ち当たり、収束する（収束し）→

(16)

収まっている、抑制する（抑制さ）→抑えられ、比べる（比べ）→**比較し**、ヘッジする（ヘッジする）→危険回避（の空売り）をする、できる（できる）→**可能である**

形容語：顕著だ（顕著）に→著しく・明らかに

副詞：極めて（極めて）→**非常に**、やや（やや）→**若干**

動詞の中で囲み線を記した「安定した」「安定化する」であるが、「化」の有無と和語への変換時の相違は無く、両者の関係は明確ではない。また、「懸念され」「経験し」「直面し」は、文脈から言い換えられると思われる表現であり、直接語種が対応している訳ではない。なお、「できる」は漢語化すると形容語となる。

対象外の語では、「なる」4例、「ある」1例がある。

4. 3. 3. まとめ

硬い文体として提示した2資料であるが、いずれも RJF は23%、約37%と、4割を切っている。

この中で、「もたらす」「思う」といった文中並びに文末表現は特に、漢語ないし外来語での表現がなされにくいものと思われる。

ここから、依然として調査は必要であるが、硬い文体の標準値は RJF30%程度である可能性が見られた。

5. 結論

本稿では、文体における語の計量的研究について、安部氏による RJF を用いた研究手法を踏襲した。その結果、次のことが明らかになった。

それは、RJF による値と、一般に知られるやわらかい文体は対応し、更にやわらかい文体には和語が多く用いられているということである。一方、硬い文体においては、RJF がどの程度の数値を出せば「硬い」と見做されるか、という基準値は明確ではなく、3割程度の値でも「硬い」と捉えるのか否か、より調査する必要が生じた。

以下に、使用資料とその RJF 値、漢語語種率も併せて掲載する。

この結果からやわらかさ、硬さという文体差に関して RJF を用いながら、その基準を明確化することが今後求められるであろう。後述するように RJF には課題もあるものの、これを用いることにより、上記のように一度に文体と語種率の関係を捉えることが可能となるのであり、大いに可能性を有していると言うことができる。

6. おわりに——今後の課題

文章を文体的、ジャンルの的に分類するにあたり、RJF が有効であることが明らかに

文体	作品名	RJF (%)	総数	和語数	漢語数	漢語語種率 (%)
やわらかい	「ごんぎつね」	97.4	37	38	1	2.6
	『あらしのよるに』	94.7	38	36	2	5.3
中間	『ミクロ経済学入門講義』	56.8	37	21	16	43.2
	「平成19年版防衛白書」	45.2	42	19	23	54.8
硬い	「日本国憲法」	23	39	9	30	77
	「平成18年6月8日物価安定下の世界経済、世界経済の見通し」	36.6	41	15	26	63.4

なった。しかし、既に挙げた点以外にも、今後の可能性であり課題でもある事柄が幾つか浮かび上がっている。

最後に、そのような発展的課題を何点か述べたい。

①日本語における複合動詞の位置検討

前述のとおり、複合動詞の中には語種変換すると意味が異なるものがある。このように、語種による意味分野の共通点並びに相違点を割り出していくことも語種変換作業を行うことの意義でもあり、それぞれの語の意味範疇を明らかにすることで、日本語において複合動詞というものがどのように位置づけられているかを考えていきたい。

②漢語文体といえる文体の有無の確認

今回、硬い文体として選択した資料ではあるが、RJFとしては平均して3割という結果となった。近年は、ニュースや新聞、医療現場など様々な場において、よりやさしい言い方が望まれるようになってきていることもあるためか、いわゆる漢語文体が生じにくくなっているように思われる。また、硬い文体の典型ともいえるであろう憲法の前文ですら漢語比率は7.7割であり、数値として明らかに漢語文体といえるような文体は現代語においてどのようなものがあるのか、今後調べていきたい。

③名詞をRJFに含めること

安部（2013）においても、名詞を取り上げていなかったことに関して今後の課題と記されている。本稿においても、各文体の特徴を明確化させるには名詞が必要であると捉えたものの、どこまでを算出する必要がある名詞とするか、接辞や代名詞などをどのように捉えるか、といった分類上の難しさから除外している。名詞により漢語文体の「難しさ」が生じる可能性があるとするれば、名詞を含めたRJFの算出・分析は今後不可欠であると考えられる。

④“和語”対“語幹+機能語”としてのRJF考察

(18)

今回は、文体による特徴を出すことが目的であり、単純に和語とその他という語種のみで分類考察を行った。しかし、日本語の傾向として安部（2013）で述べられているように「語彙が、交換可能な、パーツ化している文体」になってきていると言えるのかを測るには、今後更に考察を進めていかねばならないように思われる。

この一助となるような RJF の応用的な活用方法としては、「和語（ないし、統合的な語）」と「語幹＋機能語」（名詞を含む）という分類による考察が挙げられる。更に場合によっては RJF という名称を変える必要があるかもしれない。本稿ではこれ以上追及しないが、今回使用した作品を概観しても、漢語比率が高い、とされた文体における語よりも、和語文体ないしやわらかい文体において和語とした語の中から、「語幹＋機能語」となり得る語がある程度検出されると思われ、この方法の可能性を示唆している。ただし、「語幹＋機能語」型の語として、副詞の取り扱いが増々難しくなる点など、今後の課題は依然として残る。

更に、日本語学習者や、日本語母語話者でも子どもにとって「やさしい日本語」が示されているものの、その「やさしさ」がどこから来るのか、それと「語幹＋機能語」という傾向が重なるのか否か、といった点について、今後深く調べていく必要があるだろう。

注

- 1 「RJF = Ratio of Japanese words to Foreign loanwords (verbs, adjectives and adverbs).」補注参照。なお、安部（2013）では次のようにある。「RJF=native Japanese words, the Foreign loanwords Ratio (of verbs, adjectives, and adverbs). (直訳的には和語 vs 外来語比率となるが、《和語÷（動詞・形容語・副詞）における「和語＋広義外来語の総数」の意識とする。漢語語数を分子に置くことで、「漢語語種率」とすることもできる。）」
- 2 本稿では、前者を「やわらかい文体」、後者を「硬い文体」と便宜上呼ぶこととする。
- 3 動詞・形容語・副詞における和語の総数である。
- 4 形容語とは、形容詞並びに形容動詞の総称である。本稿でもこの語を踏襲し、使用する。
- 5 範囲を指定するに当たり、文字数ないし単語数を統一する考え方もあるが、今回は文の長さよりも語数による比較を重視した。
- 6 安部（2013）による表記に基づいている。
- 7 ここでは、矢印の右側に〈品詞別出現語一覧〉同様、終止形（出現形）を載せ、矢印の左側には出現形のみを言い換えた形を載せる。以後の全ての資料でも同様とする。

- 8 本稿では資料として使用しなかったが、化学や生物などのテキストや医療関連の雑誌ないし論文記述においても、「外来語+する」の形は散見された。

【補注】

安部は、和語語種率の英語定義と略語形 RJF (安部2013注記) を、以下のように訂正している (私信による)。本稿では、その RJF とその訳語の 1 つである「和語語種率」を採用している。cf. 注 1

RJF=Ratio of Japanese words to Foreign loanwords (verbs, adjectives and adverbs).

RJF is the ratio calculated as the percentage of "Native Japanese words" in a sentence that includes Foreign loanwords: The total number of "verbs, adjectives and adverbs" only for the "Native Japanese words" as the numerator, the total number of "verbs, adjectives (adjective+adjectival verbs) and adverbs" as the denominator.

RJF enables the quantification of the percentage of Japanese words in the total number of Native Japanese, Chinese and foreign language (Western foreign language) words for these three parts of speech. Thus the style trends of Japanese language can be compared in numerically.

和訳: RJF (和語語種率、和語外来語率)=RJF は、文章中における「動詞・形容語 (形容詞+形容動詞)・副詞」の総用例数を分母とし、「和語」のみの「動詞・形容語・副詞」の用例数を分子として、その比率を%で算出したものである。

RJF によって、これら 3 つの品詞における和語・漢語・外来語 (西洋外来語) の総数に対して和語の締める比率を数量化でき、日本語文体の和文的文体傾向を、数的に比較することが可能となる。

*なお、英語略語として、安部 (2013) 아베 (2013) では、樺島の MVR (日本語語順によるか) に倣って RJF としたが、上記の英語の定義の abbreviation として RJF とする。(2013年 8 月安部)

文献一覧

①参考文献一覧

安部清哉 (2009) 「第 3 章 意味から見た語彙史—“パーツ化” “名詞優位化”」

(安部清哉・金水敏共編『シリーズ日本語史 2 語彙史』岩波書店)

아베 세이야 (安部清哉) (2013) 「일본어 어휘의 역사적 구조변화와 그 관점에서 살펴본 일한 (和漢) 두 문체의 유형지표」『일본어학과 일본어교육 3 어휘』, 한미경 편, J&C. (グラフが脱落している)

(20)

- (安部清哉 (2013) 「日本語語彙の歴史的構造変化とそこから見た和漢 2 文体の類型指標」 韓美卿編『日本語学・日本語教育』J&C. (大韓民国)。아베세이야 (安部清哉) (2013) の日本語版 (グラフが脱落している)
- 樺島忠夫・寿岳章子 (1979) 「文体の統計的観察」(山口仲美『論集 日本語研究 8 文章・文体』 p. 179~198)
- 小野望・田中省作・持尾弘司 (2008) 「母語学習者コーパスの基礎調査」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』(18)、pp. 27-36、筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所
- 田貝和子 (2012) 「日本語の計量的分析：教養ゼミナールでの試みから」『秋田工業高等専門学校研究紀要』47、pp. 106-111、秋田工業高等専門学校
- 小池清治、鈴木啓子、松井貴子 (2005) 『シリーズ〈日本語探究法〉 6 文体研究法』朝倉書店
- 山口仲美 編 (1979) 『論集 日本語研究 8 文章・文体』有精堂
- 金田一春彦他編 (1978初版、1988) 『学研 国語大辞典 第二版』学習研究社
- 西尾実他編 (2009) 『岩波 国語辞典 第 7 版』岩波書店

②使用資料一覧

本稿において対象とした資料は以下の通りである。

やわらかい文体：

- ①新美南吉 (1932) 「ごんぎつね」青空文庫／底本：『新美南吉童話集』岩波文庫、岩波書店1996年第 1 刷、1997年第 2 刷 (http://www.aozora.gr.jp/cards/000121/files/628_14895.html)

- ②木村裕一 (1994、2005第39刷) 『りとる② あらしのよるに』講談社

中間の文体：

- ①田中宏 (2004) 『ミクロ経済学入門講義』啓文堂

- ②防衛相 (2007) 「平成19年版防衛白書」

(http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/2007/2007/index.html)

硬い文体：

- ①「日本国憲法」(青空文庫／底本：(1994) 「解説世界憲法集第三版

樋口陽一・吉田善明編)三省堂、第 3 版第 1 刷発行、「憲法問題資料集労働者教育協会編集」学習の友社)

- ②内閣府白書 (2006) 「物価安定下の世界経済、世界経済の見通し」

(世界経済の潮流 (世界経済報告、H14~年 2 回刊行))

(http://www5.cao.go.jp/j-j/sekai_chouryuu/sh06-01/pdf/sh06-01-01-00.pdf)